

電気のふるさと

電源地域ニュース

● 特集 Pick Up!

平成18年度 (財)電源地域振興センター マーケティング調査事業活用事例
産・学・官連携で伝統工芸に新しい息吹を

次世代感覚の導入で会津漆器を活性化

福島県 会津若松市



2 人
資源を活用した電源地域の振興
下平尾 勲

3 Pick Up !
次世代感覚の導入で
会津漆器を活性化
福島県 会津若松市

8 ふるさと応援団
すながわスイートロード協議会
北海道 砂川市

10 いきいき電源地域
川内・甕とれたて市
鹿児島県 薩摩川内市

ビッグひな祭り
徳島県 勝浦町

12 センター掲示板
・平成19年度 研修のご案内
・「夏休み親子体験学習会 2007 in 東京」
参加募集のお知らせ
・平成19年度下期 電源過疎地域等企業
立地促進事業費補助金について
・「電気ふるさと 新じまん市」を
千葉・幕張メッセで開催しました
・「電気ふるさと じまん市 産品ネット
ショップ」リニューアルのお知らせ
・Vol.7 読者の声から
・人事往来
・読者プレゼント

16 電気のふるさとと産品自慢
くずどーふ地酒
滋賀県 木之本町

今号の表紙

下郷水力発電所(電源開発)
総出力:100万kW
営業運転開始:昭和63年4月(1.2号機)
:平成3年6月(3.4号機)



資源を活用した電源地域の振興

福島学院大学教授
下平尾 勲



わが国において直面する国際競争や社会福祉費の増加などの諸問題を経済成長の解決で解決していくというのが経済成長戦略である。その大綱の基本は、①生産性の向上、②地域・中小企業の活性化、③改革による需要創出、④制度の整備にあるとされた。その重要な一つの柱である中小企業の活性化のための「地域資源活用促進法」が衆参両院を通過した。

地域の「強み」となる地域資源を地域主導で掘り起こす取り組みを支援する法律である。

地域資源には、製造業、商業、農林水産業、観光資源、サービス業、さらに人脈、歴史・文化等が広く包含される。五年間で一〇〇〇件の地域資源を生かした新事業を創出するのだという数値目標が掲げられている。

地元資源を掘り起こしていくためには、資源そのものに技術、マーケティング、人脈、ブランドなどを付加し、新たな商品を開発し、新産地を形成し、サービスの開発と提供を創出していくこと

になるが、意欲のある中小企業の事業活動を「地域資源活用促進法」は支援しようというものである。①基本方針は経済産業大臣が策定し、②目標と手段、いかなる資源を重要戦略とするかという基本構想は県知事が策定する。③どのような事業をいつまでに誰がどのように実施するかは地元中小企業者が作成する。中小企業者は事業計画の認定を受けることによって、中小企業の振興上難点となっていた①市場動向の把握、②商品企画、開発のための外部人材の確保、③大都市市場開拓のための情報の手と発信、④資金調達等の面で支援を受けることができる。

電源地域においては、地域内資源を見直すとともにその中で電源立地自体も有力な資源だとする事業計画が必要であろう。「地域資源活用促進法」は、地域の自立と雇用拡大という政策を掲げる地域にとっては、重要なチャンスである。そのためには人材発掘と組織の形成が何よりも重要であろう。

福島県 会津若松市

歴史が薫る山間の城下町・会津若松市

福島県西部の会津盆地に位置する会津若松市。名峰・磐梯山をはじめとする山々や猪苗代湖などの豊かな自然に囲まれ、約三百八十平方キロメートルの総面積に、約十三万人が暮らす会津地方の中核都市です。美しい自然とともに、会津松平氏二十一万石の城下町として栄えた歴史を色濃く留め、情緒あふれる東山温泉・芦ノ牧温泉もあって、会津若松市は東北有数の観光地として発展してきました。また肥沃な平坦地では水田による稲作も盛んで、さらに、おいしい米と清冽で豊富な水を利用した酒造りでも知られてきました。地域には、電源開発株式会社の下郷水力発電所(揚水式百万ワット)があり、多くの電気を供給しています。

昔から会津を支えてきた代表的な産業といえば「会津漆器」です。しかし、かつては全国的に出荷し隆盛を誇った会津漆器産業も、ライフスタイルの変化による需要の減少や、外国産漆器製品の大量輸入により急激に出荷が落ち込んできました。

四百年の伝統を誇る会津漆器産業がピンチに

会津漆器は、十六世紀末に蒲生氏郷が会津の領主になって以来、四百年の歴史に育まれてきた伝統工芸です。氏郷は前の領地であった近江の国(現 滋賀県)から木地師や塗師を呼び寄せ、新たな産業づくりのために盛んに漆器を作らせました。やがて技術は飛躍的に進歩し、漆の栽培から加飾(絵付け)まで一貫して手がける一大産地に発展したのです。江戸時代にも歴代の藩主によって保護育成は引き継がれ、中国・オランダへ輸出されるなど隆盛を迎えます。幕末の戊辰戦争によつ



1.会津若松市のシンボルである鶴ヶ城 2.鶴ヶ城の天守閣からは雄大な山々に囲まれた会津若松市内が一望できる
3.市内には白壁の土蔵、店蔵など、明治や大正期の建造物が点在している 4.会津若松の代表的な伝統工芸品である「赤べこ」

Pick Up

平成18年度(財)電源地域振興センター マーケティング調査事業活用事例

産・学・官連携で伝統工芸に新しい息吹を 次世代感覚の導入で会津漆器を活性化

福島県会津若松市は、美しい自然と数々の歴史に抱かれた東北有数の観光地です。また伝統工芸品・会津漆器の産地としても全国的に有名です。しかし近年では、会津漆器産業が年々衰退傾向にあり、危機感を抱いた行政と漆器職人は、大学と連携して漆器産業の活性化プロジェクト「會's NEXT」事業を立ち上げました。今回は、三者が力を合わせて新感覚の漆器づくりにチャレンジしている会津若松市をご紹介します。

お問合わせ先: 会津若松市 観光商工部 商工課 TEL 0242-39-1252 <http://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/>
「會's NEXT」 <http://www.aizu-next.com>



会津若松市役所 観光商工部 商工課 主事 岩橋 美穂さん

て、一時は壊滅的な打撃を受けましたが、ががて復興し、明治中期からは再び全国有数の漆器産地となっています。

会津漆器業界では、多くの需要に対応するため、問屋が商品の企画・生産管理・販売などを担当し、職人は問屋からの注文を請けて、木地づくり、漆塗り、加飾などの工程に分かれて専念する体制を築いてきました。この分業体制によって会津漆器はさらに生産量を伸ばし、昭和四十年代には事業所数が七百五十を超え、製造従業員(職人)数も四千人以上にのびりました。

ところが二十年ほど前から、安価な外国産漆器が大量に輸入されるようになり、また消費スタイルの変化から、国産漆器市場が多品種少量生産へと大きくシフトしたため、対応できない問屋は会津漆器産

業から次々に撤退していきました。現在では事業所や職人の数とも最盛期の約三分の一にまで減ってしまったのです。

「以前のように問屋は職人を抱えることが難しくなり、舵取りを失った職人は独立・自活の必要に迫られるようになりました。もともと消費者と触れ合う機会の少ない職人にとって、問屋の発注仕様こそがニーズであり、仕様通りに作ることが業務成果だったのです。そのため、どのような商品を作っていけばいいのか、売れる商品とは何か、についてまで意識する職人は少なく、

「会津漆器の『次』をめぐって『会津漆器のNEXT』事業がスタート

きつかけは大学の呼びかけと職人の危機感

それは東京・八王子市にある、東京造形大学からの提案でした。大学の教員から福島県ハイテクプラザ会津若松技術支援センターを通して、岩橋さんのもとへ届いたのです。その提案とは、学生たちのアイデアと職

独立・自活の道は険しいものだった」と語るのは、会津若松市役所・観光商工部の岩橋美穂さん。

「でも、生き残りに必死な職人さんの中には、インターネットの活用による通信販売や展示即売会への出展など、新たな取り組みに挑戦する方もおられました」。

危機に直面し、もがいている職人の手助けをできないか、また伝統の漆器産業を復興させることはできないかと考えていた岩橋さんに、平成十七年の九月、ある知らせが飛び込んできました。

人の技術で新しい漆器を創作するといふものでした。学生にとっては実践的なデザインの勉強になり、職人は斬新な発想を得ることができるといわれています。

岩橋さんはこの時、東京造形大学が他の美術大学二校とともに平成十五年から「えどがわ伝統工芸産学プロジェクト」

「会津漆器のNEXT」と命名されました。

いよいよ学生たちとの共同作業がスタート

五月中旬、十一人の学生たちが各々アイデアを持参し、職人たちのもとへやってきました。アイデアの発表は、図案とキャッチコピーが描かれたプレゼンボードを使って学生が説明するという形で行われました。プレゼンテーションの後、職人たちが、自分の気に入ったものをセレクトしました。この

「デザインも斬新で面白いものが多かったのですが、その商品をどういうコンセプトで売り込んでいくのか、というところまで考えてくれたことがよかったです。たとえば『見せ弁』という弁当箱では、『かばんの底へしまってしまうお弁当箱、かばんに入らず荷物になっってしまうお弁当箱を外に出して着こなそう』といった斬新なコンセプトを提案してくれました。会津漆器といえばお椀やお盆といったテーブルウェアをイメージする私たちに、若い人の『あったらいいな』という自由な発想が新しい視点をもたらしてくれたのです。もちろん中には商品にはなりそうもないと思うものもありました。でも今回はとにかく既成の考えを捨てて、学生のアイ

に参加していることを知りました。このプロジェクトは東京都江戸川区の伝統工芸職人とともに新製品を開発し、市場開拓・販売促進などの支援をする活動です。

このような伝統工芸への支援活動に実績のある大学からの提案を聞き、いいチャンスだと考えた岩橋さんは、漆塗り職人で会津漆器協同組合の副理事長でもある細谷誠さんに声をかけます。

「会津漆器業界でも、人件費・材料費の安価な海外への生産委託が増えています。従来の生産体制に依存したまま、企画や販売を問屋任せにし続ければ、職人の仕事量がじり貧状態になるのは明白でした。なんとか従来のやり方を変えていかなければと思っていました」と語る細谷さん。そんな矢先に舞い込んできたこの企画に細谷さんはすぐに賛同しました。

また、岩橋さんは、漆器業界と大学との橋渡しをするコーディネーターが必要と考えました。そこで抜擢されたのが、若年二十七歳の若さで会津地

域を盛り上げる先導役として活躍している株式会社明天の代表取締役、貝沼さんでした。貝沼さんは「伝統工芸の現場へ若者を送り込むプロジェクト」を主軸に、地域に新しい出会いとチャレンジの場を創出する活動を精力的に進めており、コーディネーターに適任と岩橋さんは考えたのです。

岩橋さん、細谷さん、貝沼さんが集い、早速今後の計画が話し合われました。そして翌十月には東京造形大学の学生二十人を市内で開催された「二〇〇五 会津ブランドものづくりフェア」に招待し、実際に会津漆器を見てもらいました。また、翌平成十八年の一月には岩橋さんや細谷さんたちが東京造形大学を訪問して交流を図るなど、この企画の下準備が進められていきました。

「デザイナーも斬新で面白いものが多かったのですが、その商品をどういうコンセプトで売り込んでいくのか、というところまで考えてくれたことがよかったです。たとえば『見せ弁』という弁当箱では、『かばんの底へしまってしまうお弁当箱、かばんに入らず荷物になっってしまうお弁当箱を外に出して着こなそう』といった斬新なコンセプトを提案してくれました。会津漆器といえばお椀やお盆といったテーブルウェアをイメージする私たちに、若い人の『あったらいいな』という自由な発想が新しい視点をもたらしてくれたのです。もちろん中には商品にはなりそうもないと思うものもありました。でも今回はとにかく既成の考えを捨てて、学生のアイ

「デザイナーも斬新で面白いものが多かったのですが、その商品をどういうコンセプトで売り込んでいくのか、というところまで考えてくれたことがよかったです。たとえば『見せ弁』という弁当箱では、『かばんの底へしまってしまうお弁当箱、かばんに入らず荷物になっってしまうお弁当箱を外に出して着こなそう』といった斬新なコンセプトを提案してくれました。会津漆器といえばお椀やお盆といったテーブルウェアをイメージする私たちに、若い人の『あったらいいな』という自由な発想が新しい視点をもたらしてくれたのです。もちろん中には商品にはなりそうもないと思うものもありました。でも今回はとにかく既成の考えを捨てて、学生のアイ

「デザイナーも斬新で面白いものが多かったのですが、その商品をどういうコンセプトで売り込んでいくのか、というところまで考えてくれたことがよかったです。たとえば『見せ弁』という弁当箱では、『かばんの底へしまってしまうお弁当箱、かばんに入らず荷物になっってしまうお弁当箱を外に出して着こなそう』といった斬新なコンセプトを提案してくれました。会津漆器といえばお椀やお盆といったテーブルウェアをイメージする私たちに、若い人の『あったらいいな』という自由な発想が新しい視点をもたらしてくれたのです。もちろん中には商品にはなりそうもないと思うものもありました。でも今回はとにかく既成の考えを捨てて、学生のアイ

「デザイナーも斬新で面白いものが多かったのですが、その商品をどういうコンセプトで売り込んでいくのか、というところまで考えてくれたことがよかったです。たとえば『見せ弁』という弁当箱では、『かばんの底へしまってしまうお弁当箱、かばんに入らず荷物になっってしまうお弁当箱を外に出して着こなそう』といった斬新なコンセプトを提案してくれました。会津漆器といえばお椀やお盆といったテーブルウェアをイメージする私たちに、若い人の『あったらいいな』という自由な発想が新しい視点をもたらしてくれたのです。もちろん中には商品にはなりそうもないと思うものもありました。でも今回はとにかく既成の考えを捨てて、学生のアイ

「会津漆器のNEXT」

職人と美大生のコラボレーション



重箱スライス



大人カメラ



いれこ



フリスケース



見せ弁



大和スピーカー

会津漆器づくりの工程について

会津漆器づくりには大きく分けて次の三つの工程があります。

●木地づくり
木材は切り出し、およその形にした後、割れたり歪んだりしないよう何ヶ月も乾燥させます。その後、丸物(お椀・お盆)は手挽きろくろを使い、木にノミを当てる微妙な加減で形を作ります。板物は木を薄い板に加工し、にかわなどの接着剤で箱型を作ります。



●漆塗り
まず木地を丈夫にするために生漆などを使って下地付けをします。その後、下塗り・中塗り・上塗りの三段階で丹念に漆塗りを仕上げていきます。



●加飾
漆器に絵や模様をつけることです。朱・黄・青などを混ぜた彩漆で描く“漆絵”、金・銀粉と彩漆で描く“蒔絵”、表面を削り金箔をかぶせる“沈金”という方法があります。



會sNEXT 木地師 三浦 圭一さん

学生の思いがけない発想が大きな刺激に

他の職人たちも、初めての大学生との交流を通じて大きな刺激を受けたといいます。木地職人で「會sNEXT」に参加した三浦圭一さんはこう話してくれました。

「正直言いまして初めは、学生の考えるものなんかという懐疑的な気持ちもあったので。でも実際に会って話を聞いてみると、若い人の思いがけない自由な発想に刺激を受けました。職人は作業場にこもってばかりいて、どうしても考えが狭くなってしまふ。これからはもつと外に出て勉強しなければいけないと思いました。実製作の段階での苦勞も次のように話してくれました。

反面、苦勞から得たメリツトもあつたようです。「いろいろと苦勞もありましたが、今まで作つたことのないものにチャレンジして職人のスキルアップにつながつたと思います。また短期間での試行錯誤しながらの苦勞は、逆に自信にもなりました」と三浦さんは笑顔で語ってくれました。

試作品を地元と東京の展示会で発表

こうして大学生と会津漆器職人のコラボレーションによって作られた、初めての試作品は完成しました。そしてその年の十月二十八・二十九日に市内で開催された「二〇〇六 会津ブランドものづくりフェア」への出品が実現したのです。続いて翌十二月二十九日から一週間、

東京・新宿のオフィス街にあるホールでの展示会が開催されました。この二つの展示会では、マーケティング調査事業の一環として細かなアンケート調査が実施され、試作品に対する来場者の反応の分析も行われました。地元会津では今までにないデザインの漆器に対して驚きの反応があつた一方で、東京ではビジネスマンやOLたちから「面白い」「贈り物にもいい」などの声が聞かれました。

漆器の見方が変わったと学生にも影響を与える

「実は会津でも、近年、漆器が名産品であるという意識が薄れてきています。『會sNEXT』事業や会津会場での展示会は、地元の人に会津漆器を見直してもらおうきっかけにもなつたと思います。東京の大学生とのコラボレーションということで、地元紙にも取り上げ



株式会社 明天 代表取締役 貝沼 航さん

てもらい大きなアピールになりました」と語るのは、コーディネーターとして参加した貝沼さん。また「會sNEXT」の活動は、職人だけではなく都会の大学生にも強い刺激を与えたといいます。「ある女子学生は、漆器への見方が変わったと言っていました。以前はデパートで見て、なんでこんなに値段が高いのかと思つたけれど、一つの商品が出来上がるまでにかかる膨大な時間と職人さんの高い技術を見て納得した。それに若い人は、まるで外国人のような新鮮な目で日本の伝統工芸を捉えるのです。古くさいなどという認識はなく、むしろ『かっこいい』という感覚で漆器を受け入れています。また近年では、若者が職人の世界に憧れを持つようになってきて、職人と若者との接点広がりがつつあると思います」と貝沼さん

「本事業の最大のポイントは、アイデアを取り入れるだけでなく、夏季休暇などを利用して産地滞在型で時間をかけて密度の濃い意見交換を行うこと。価値観やセンスの違う若者と一緒にデザインや売り方を考えるという過程の中にこそ、作り手が『自立したものづくり』へシフトするための大切な気づきのエッセンスが凝縮されていると確信しています。また、若者が産地に入り込むことで、地域の活性化や人材育成に繋がると考えています」と貝沼さんは事業に対する意気込みを語ってくれました。また、今後の活動について貝沼さんは「今回のコラボレーションで新しい感覚の試作品

が出来上がりました。今は、作品の販売体制の構築に向け、準備を急いでいます。セレクトショップの店長やブランドアドバイザーなど、売りのプロのアドバイザーを仰ぎつつ、インテリア会社の商品企画部などとの連携を広げています」と話してくれました。

「私たちの『會sNEXT』事業の目的は、会津漆器の産業界での発展です。職人レベルの取り組みで終わつてしまつてはいけません。古い業界の体制から脱却して、新しいビジネスモデルを確立していかなければなりません。そのためには職人それぞれがもつと自立意識を高めることです。大切なのは、自分でコンセプトを立てて商品をプロデュースしていく姿勢。職人が自由にもつくりをしていけるような業界にしたいですね」と、最後に細谷さんが語ってくれました。伝統の技に誇りを持ちながら、過去にこだわらず、次々めざして前進する「會sNEXT」。新時代の職人氣質が、会津の地にしっかりと根付き始めています。



すながわ スイートロード 協議会

ふるさと応援団・北海道砂川市

業の始まるまでのいきさつや今後の展望なども含めご紹介いたします。

■ 通過されるまち ■

北海道のほぼ中央に位置し、豊かな緑と水に囲まれた砂川市。市の中心部を貫く国道十二号は札幌と旭川を結ぶ幹線道路で、二十九・二丁目という日本一の直線距離を持つことで知られていいます。この国道を中心に十二の菓子店が軒を連ねており、その一帯を「すながわスイートロード」として全国に向け発信しているのが「すながわスイートロード協議会」です。今回は「お菓子」を起爆剤としたまちづくりに取り組んでいる「すながわスイートロード協議会」について、事



取り戻したい」とそう考えた砂川市は、まちおこしに活用できる地域の資源はないかと考えました。幸い市内には、炭鉱労働者の疲労を癒したり、工場労働者の帰省時のお土産として発展してきた菓子業がありました。市内には、産業が衰退した後もなお、地道な活動を続けていた砂川菓子組合があったのです。菓子店が

業の始まるまでのいきさつや今後の展望なども含めご紹介いたします。

■ 地域の資源は？ ■

「もう一度、まちに活気を

集積する国道十二号沿いをま

■ さまざまな取り組み ■

「すながわスイートロード

ちおこしの目玉に――。そんな「すながわスイートロード構想」は平成十二年にスタートしたのです。

■ いよいよ事業がスタート ■

ところが、事業は思いがけない壁にぶつかります。まちづくりの先導者という大役に遠慮する菓子業者や、「菓子業界への優遇」と反発する声が聞かれました。しかし、二年にわたる粘り強い説得の結果、各方面からの協力を取り付けます。そして平成十四年五月に「すながわスイートロード協議会」を設置。基本方針は地域住民団体及び菓子組合が決定し、行政はフォロイを行う住民主導型の体制で走り出したのです。

二つめは「商業界レベルアップ事業」です。商店街の協力を得て、七夕やハロウィン、クリスマスなどに各店舗の装飾やディスプレイを実施。季節ごとの彩りに、買い物客はもろろんのこと国道を歩き交うドライバーにも好評を得ています。また、接客講習会やラッピング講習会を実施するなど、商店街全体のレベル

すながわスイートロード MAP

砂川生まれの菓子店9社

- ①いよだ
- ②岩瀬牧場
- ③北菓楼
- ④壺屋
- ⑤ナカヤ
- ⑥ショコラノル HORI
- ⑦ほんだ
- ⑧フチ・トリフ山屋
- ⑨吉川食品

すながわ スイートロード協議会

北海道砂川市西六条北 3丁目 1-1
砂川市役所 商工労働観光課内
TEL.0125-54-2121
<http://sunagawa-sweetroad.com/>



1. 2. 菓子職人・パン職人が講師となり開催される体験教室は、プロから直接学べるとあって、募集開始早々に定員いっぱいになる人気ぶりです。



3. ハロウィンの時期には、砂川商店会連合会の協力により、ちょうちん装飾用カボチャ(550個)が市内9商店会へ配られ、各商店や事業所がそれぞれちょうちんを作成し、店頭を装飾。夜にはロウソクが灯され、まちを彩りました。

アップに取り組んでいます。三つめはPR事業です。事業者単独では難しかった市外への広告も、「すながわスイートロード」として情報発信することで、旅行雑誌や地域のFMラジオに取り上げてもらえることができるようになりました。

■ 地元青年会議所が事業を盛り上げ ■

砂川青年会議所は平成十八年十月に「すながわスイートロードを応援する会」を立ち上げました。参加者を募集したところ、予想を超える三十四人が集ってくれました。会では「すながわスイートロード」の理解促進事業を実施するとともに、「スイートロード」に関するアイデアや意見を提言するなど、事業の盛り上げに役かっています。

「立ち止まるまち」へ

地道な活動が実を結び、旭山動物園を訪れる札幌方面からのお客さんが「すながわスイートロード」に立ち寄り、全国的に販路の広がりを求めています。しかしながら、「すながわスイートロード協議会」の最終目標は、市内外から商店街にお客さんをお呼び込むこと。今後は「すながわスイートロード」を中心とする砂川市全体の地域活性化に向けた取り組みが期待されます。

「電気のふるさと」電源地域ニュース」では、電源地域のさまざまな取り組みを紹介しています。このコーナーでは、読者の皆様からお寄せいただいた「意見・要望」を積極的に誌面に反映させて参りますので、皆様の地域で取り組んでおられる事業や施策をどしどしお寄せください。巻末にご覧いただけます。活用ください。心よりお待ちしております。

徳島

夢づくりの町、勝浦町へようこそ！

～日本一のひな祭り、ビッグひな祭り～

徳島県 勝浦町

“清流に緑映え人輝くまち”勝浦町は、人口6,350人の小さな町ですが笑顔がたえない本当に温かなところですよ。

その勝浦町が誇る一大イベント「ビッグひな祭り」は、毎年3月3日を中心に15日間開催しており、全国から使われなくなったひな人形を譲っていただき、メインのピラミッド型ひな壇を中心に館内いっばいに約2万体を飾ります。また、周囲の特設ひな壇やその周辺には、手作りのおひな様を飾っています。さらに、壁面にはちぎり絵やジャンボ掛軸をずらりとかけ並べ、ひな祭りに関する文芸作品や大壁画、書写作品なども飾り、まさに日本一華麗な雛飾りになっています。



現在では、年間の入場者数4万人の一大イベントになっていますが、ここまでの道のりは決して楽なものではありませんでした。当初「ビッグひな祭り」は、町の夢づくりの一つとして町職員青年有志で組織する「ひな祭り実行委員会」が主催し、平成元年から第3回まで実施してきました。

しかし、第4回から予算と人出不足で実施が危ぶまれてきました。その時、勝浦町民の「勝浦町に定着しかけたイベントを無くしたくない」「今まで見に来てくれた人たちががっかりさせたくない。そして、なによりも子供たちの夢のために」の声で、まちおこしグループである「NPO法人阿波勝浦井戸端塾」が立ち上がりました。この時よりこの井戸端塾が実行委員会の中心となって活動を引っ張り、来年記念すべき第20回を迎えます。

ここまで、この一大イベントを成功させてこれた最大の要因はなんといっても実行委員のひたむきなボランティア精神と

町内外から集まったのべ約500人の力強いボランティアのおかげです。これらの熱意が広く住民を沸き立たせ、強力な集客力となって県内外からの移動人口が増加しました。

さらには、おひな様を中心とした交流の輪が、全国だけでなく全世界に広がってきました。たとえば、イギリスの小学校やアメリカ数カ所で開催されたジャパンウィーク^{*1}を始め、各国に多数のおひな様を贈り、おひな様を親善大使として国内外との交流を深めています。

最近では、毎年継続開催している「ビッグひな祭り」がマンネリ化しないよう、「ひな人形に贈る言葉」の募集・掲示や勝浦の伝統芸能である「勝浦座人形浄瑠璃」の上演など、毎回様々なアイデアを出しイベントを引き立てています。

そのほかにも勝浦町には「与川内ホテルまつり」「今山農村舞台^{*2}」など、たくさんの夢づくりがあります。皆さんも勝浦町に来て勝浦町の夢を体験してみませんか？

*1「ジャパンウィーク」とは、(財)国際親善協会が支援する国際文化交流事業で、日本の生活文化、芸能、美術、音楽、ファッション、スポーツ、経済等を通じて日本を紹介するとともに、開催地住民も参加し、相互理解・友好親善を図っています。
*2「農村舞台」とは、江戸時代頃から村人が歌舞伎や人形芝居を上演し楽しむため、各地に設けられた舞台です。今山地区では、今宮神社に残る農村舞台が地元の人たちの手によって、約70年ぶりに復元されました。



なんといっても圧巻は会場中央にそびえ立つピラミッド型のひな壇です。その高さは5.5メートルもあり、四方に各25段、合計100段のひな壇に約3,000体のひな人形を飾っています。

お問い合わせ先
勝浦町 産業建設課
TEL 0885-42-1505

鹿児島

「川内・甌とれたて市」で地域活性化へ

鹿児島県 薩摩川内市

薩摩川内市は、薩摩半島の北西部に位置しており、九州地方では筑後川に次ぐ第二の規模を誇る川内川が東シナ海へと注いでいます。また、薩摩半島の西方、東シナ海上には全長約35kmの甌島列島があり、東シナ海から吹く風と波によって作られた奇岩や断崖などが変化に飛んだ海岸線を作り出しています。さらには、西郷隆盛が足しげく通ったと言われ、泉質の良さから全国名湯百選に選ばれている「川内高城温泉」をはじめとする温泉が市内に点在しています。

このような様々な表情をもつ薩摩川内市は、平成16年の市町村合併によってできた新しい市で、合併当時は1市4町4村という自治体の数にあわせ、本土区域(薩摩川内)と島嶼部区域(甌)で互いに手を取り合い新しいまちを構成するという全国でも珍しい海越えの合併を行ったまちとして、話題を集めました。

翌年平成17年度には、ふるさとおこしの一環として、薩摩川内きやんせ海浜エネルギーフェスタ「薩摩川内・こしきお魚まつり」を開催し、「マグロ・カジキ重量当てクイズ及び解体ショー」や「魚のつかみ取り大会(ウナギ、カンパチ)」、「川内原子力発電所展示館見学ツアー」、「お楽しみ抽選会(水産加工品)」等の数多くのイベ



来場者でにぎわう鮮魚販売風景

ントを実施しました。会期中には市内外からたくさんの方が訪れ、好評を得ることができました。

そして、この「薩摩川内・こしきお魚まつり」の好評と、漁民や市民からの「フェスタだけではなく定期的な魚のイベントを開催してほしい」という要望に応えたのが「川内・甌とれたて市」です。平成18年度に川内市漁業協同組合と甌島漁業協同組合からなる実行委員会を立ち上げ、当日に両漁協で水揚げされた新鮮な鮮魚・活魚や水産加工品、農産物、特産品等の即売会を毎月1回のペースで開催することになりました。2時間という短時間での開催ですが、今では毎回1,500人を超える来場者で、活気ある市となっています。

「川内・甌とれたて市」の定期開催は、川内近海、甌近海の魚を広く市内外に広めることとなり、地産地消及び漁業の振興を図り、産業の振興と発展に大

きく寄与しています。さらには、継続的に開催することで、薩摩川内市のふるさとおこしの起爆剤として地域活性化につながるものと期待が高まっています。



大漁旗がはためく会場風景

お問い合わせ先
薩摩川内市 農林水産部
林務水産課 水産振興グループ
TEL 0996-23-5111

開催日：毎月第4土曜日に開催
(10月のみ、お魚まつり開催のため、お休み)
開催時間：4月～9月 15:00～17:00
11月～3月 14:00～16:00

いきいき電源地域

地域振興に取り組んでいる
電源地域の元気な姿を紹介します

平成19年度 研修のご案内

(財)電源地域振興センターでは、平成十九年度も電源地域の振興を支援するため、電源市町村の職員、農協、漁協、商工会などの各種団体職員や住民の皆さまを対象にさまざまな研修を実施いたします。

本年度の研修は、これまでに受講された参加者のアンケートにおける要望や電源市町村を取り巻く社会状況の変化を的確にとらえ、昨年引き続き「住民との協働」「民間活力の利用」「住民の経済力向上」を全ての研修における共通の課題としています。電源地域の現場で活躍する実務担当者のお役に立つ、実践的な内容を予定しています。また、センター内での研修を中心としながらも、先進事例地での視察や交流を多く取り入れた体験カリキュラム型の現地研修を引き続き取り入れることで、研修の一層の充実を図り、電源地域の人材育成に寄与する研修を行ないます。

当センターのホームページやお手元に届いた「平成19年度研修のご案内」をご確認の上、是非ご参加下さいませようお願いいたします。

No.	研修テーマ	時期	日数	定員	備考
1	～住民参加の地域づくり～ コミュニケーションセンスを磨く	H19.6	2	30	
2	～住民参加の地域づくり～ 企画立案能力開発講座	H19.6	2	30	
3	～自然に優しい環境づくり～ 「脱温暖化社会」と「循環型社会」の構築を目指して	H19.8	2	40	
4	少子高齢化社会における地域づくりを学ぶ	H19.8	2	40	
5	地域福祉のあり方を学ぶ	H19.10	2	40	
6	新しい地域づくりを学ぶ ～行政とNPO、コミュニティ・ビジネスとの協働～	H20.2	2	40	
7	～住民参加の地域づくり～ まちづくりワークショップの進め方を学ぶ	H19.12	2	30	
8	安全に暮らせるまちづくり ～地域における防災コミュニティを考える～	H19.12	2	40	
9	農山漁村で活躍する女性達 ～起業と法人化を学ぶ～	H19.7	2	40	
10	ツーリズム入門講座 (先進地に学ぶ)	H19.10	3	40	先進現地研修
11	農業の担い手対策と直販を学ぶ	H19.12	2	40	
12	水産業の担い手・経営安定化対策を学ぶ	H19.9	2	30	先進現地研修
13	地域中小企業の活性化対策を学ぶ	H19.7	2	40	
14	中心市街地活性化対策を学ぶ	H19.9	2	40	
15	観光からのまちづくりを学ぶ	H19.11	3	40	先進現地研修
16	持続可能な自治体運営を学ぶ	H19.9	2	40	
17	地域特性を活かした特産品の開発・改良を考える (東京Ⅰ)	H19.10	2	40	
18	地域特性を活かした特産品の開発・改良を考える (東京Ⅱ)	H20.2	2	40	
19	地域特性を活かした特産品の開発・改良を考える (千葉)	H19.4	2	40	先進現地研修
20	地域別ニーズ研修Ⅰ。(四国)	H19.7	2	20	経済産業局別研修※1
21	地域別ニーズ研修Ⅱ。(近畿)	H19.11	2	20	〃
22	地域別ニーズ研修Ⅲ。(九州)	H20.2	2	40	〃
23	地域別ニーズ研修Ⅳ。(中国)	H20.1	2	30	〃
24	海外事前研修/海外電源市町村トップセミナー	H19.7	1	10	海外研修参加者対象
25	海外事前研修/海外のコミュニティ・ビジネスを活用した地域振興事例を学ぶ	H19.9	2	25	〃
26	海外事後研修/海外のコミュニティ・ビジネスを活用した地域振興事例を学ぶ	H20.1	1	25	〃
27	海外電源市町村トップセミナー	H19.8	8	10	ヨーロッパ
28	海外のコミュニティ・ビジネスを活用した地域振興事例を学ぶ	H19.10	8	25	ヨーロッパ

※1 原則として、要望がある経済産業局単位で実施します。

お問い合わせ先
(財)電源地域振興センター 人材育成課
電話：03・5405・8114
e-mail: jinzai@dengen.or.jp まで

「夏休み親子体験学習会2007 in 東京」参加募集のお知らせ

お問い合わせ先
(財)電源地域振興センター 普及啓発課
電話：03・5405・8128
e-mail: fukyuu@dengen.or.jp まで

from the Center

当センターでは、経済産業省資源エネルギー庁の委託を受け、エネルギー、原子力について楽しく学べる「夏休み親子体験学習会2007 in 東京」を以下のとおり開催いたします。費用無料で参加できるうえ、夏休みの自由研究にもぴったりです。募集地域の皆さまからのご応募をお待ちしております。

親子で夏休み 親子体験学習会2007 in 東京

夏休みの自由研究に! **参加費用無料**

資源が少ない日本。地球環境問題やエネルギー問題は今や大きな課題ですね。エネルギーや原子力発電のしくみについて、親子で一緒に楽しく学びませんか?

お申込み締切: 2007年6月29日(金)

日時 2007年7月30日(月)～7月31日(火)

会場 7月30日 電力館
東京都渋谷区神南1-12-10
7月31日 科学技術館
東京都千代田区北の丸公園2-1

対象者 原子力立地・計画地域等の小学生(4～6年生対象)

対象人数 26名及びその保護者26名の計52名 応募多数の場合は抽選となります

募集地域 数字はエリア番号
1.北海道 泊村 2.青森県 大間町 3.青森県 東通村 4.青森県 六ヶ所村 5.宮城県 女川町
6.宮城県 石巻市 7.福島県 浪江町 8.福島県 南相馬市小高区 9.福島県 双葉町 10.福島県 大熊町
11.福島県 富岡町 12.福島県 楢葉町 13.新潟県 柏崎市 14.新潟県 刈羽村 15.茨城県 東海村
16.静岡県 御前崎市 17.石川県 志賀町 18.福井県 敦賀市 19.福井県 美浜町 20.福井県 おおい町
21.福井県 高浜町 22.島根県 松江市 23.山口県 上関町 24.愛媛県 伊方町 25.佐賀県 玄海町
26.鹿児島県 薩摩川内市 (順不同)

参加費用 無料

スケジュール (道路事情その他により、行程及びプログラムは変更になる可能性があります。)

1日目	電力館集合(14:00) ⇒ バス移動 ⇒ ホテル到着(17:30) ⇒ ホテル宿泊(20:00)
	オリエンテーション ⇒ 夕食 ⇒ 宿泊先: こまばエミナース おもしろいサイエンスショー ⇒ 交流会(電車でGO!(小学生) ⇒ 見聞交換会(保護者)
2日目	ホテルにて朝食後 ⇒ バス移動 ⇒ 科学技術館到着(9:15) ⇒ 記念撮影及び解散式(13:05)
	ホテルロビー集合 ⇒ 「アトモス」体験 ⇒ 各自解散 ワークショップ「プルサーマルって何?」 ⇒ 昼食

※参加費用に含まれるもの【往復交通費(公共交通機関)、宿泊費(1日目夕食、2日目朝食・昼食を含む)、科学技術館入場料】
※往復交通手段については原則鉄道利用とする。ただし、上記募集地域の中で、赤字番号の地域については、航空機利用可とする。
※募集で得られた個人情報、「夏休み親子体験学習会」に関する範囲外に利用、提供は致しません。

申込み先 財団法人電源地域振興センター 普及啓発課内 「夏休み親子体験学習会」事務局
お問い合わせ先 〒105-0013 東京都港区浜松町1-18-16 住友浜松町ビル6階
TEL: 03-5405-8128 (平日 10:00～17:00) FAX: 03-5405-8103 HP: http://www.dengen.or.jp/

主催: 経済産業省 資源エネルギー庁
運営: 財団法人 電源地域振興センター

お申込みは2007年6月29日(金)までとなっております。
申込み方法についてはお問い合わせいただくか、当センターのホームページHPをご覧ください。

平成19年度下期 電源過疎地域等企業立地促進事業費補助金について

当センターでは、国の委託を受けて、電源地域のうち、過疎地域、原子力地域等の産業振興を図るため、当該地域において新増設する企業に対し補助金の交付に関する業務の一部を行っています。

補助の対象は、企業が当該新増設によって行う生産または営業の用に直接供せられる設備(建築物(土地を除く)又は機械、器具もしくは備品)を整備する事業です。

なお、補助を受けるためには、主に次の三つの要件を全て満たすことが必要となります。
① 補助の対象となる設備は、申請者である企業が所有し、平成十九年十月以降、平成二十年二月末日までに国の交付決定を受けてから着手し、完了すること。
② 工場、事業所等の建物を新増設すること。
③ 三人以上雇用者が増加すること。

また、交付限度額については、次の三つのうち最も低い額を交付限度額とし、その範囲内で交付額を決定いたします。
① 補助対象事業に要する費用。② 左表に示した地域区分および増加雇用者数ごとに設定した面積当たりの単価と、建物の延べ床面積とを乗じて得た額。③ 左表の(一)内に示した、地域区分と増加雇

用者ごとに設定した上限額。
公募の時期は、平成十九年七月頃の前定です。

(例)食品製造会社が工場を新設し、食品製造設備の整備三千万円を補助対象事業としてこの補助制度を利用する場合、増加雇用者数が三十人、工場の新設延べ床面積が二千万メートルとしますと、補助金の交付限度額は立地地域がA地域の場合三千万円、B地域の場合千五百五十万円、C地域の場合一千万円となります。

雇用 地域 区分	増加雇用者数			
	3～9人	10～19人	20～29人	30人以上
A地域	7,500円/㎡(1億円)	10,000円/㎡(1.5億円)	12,500円/㎡(2億円)	15,000円/㎡(2.5億円)
B地域	2,500円/㎡(0.5億円)	3,750円/㎡(1億円)	5,000円/㎡(1.5億円)	6,250円/㎡(2億円)
C地域	1,250円/㎡(0.3億円)	2,500円/㎡(0.5億円)	3,750円/㎡(1億円)	5,000円/㎡(1.5億円)

- ・A地域とは、原子力発電・再処理・加工・実用ウラン濃縮・貯蔵又は廃棄のそれぞれの施設の既設置市町村、又はそれらの施設の立地見込み市町村及びその隣接市町村をいいます。
- ・B地域とは、A地域を除く立地見込み市町村及びその隣接市町村をいいます。
- ・C地域とは、電源地域のうち過疎地域の指定を受けている市町村をいいます。
- ・核燃料サイクル施設地域(むつ市、東海村、横浜町、六ヶ所村、平内町、野辺地町、東北町、七戸町、三沢市、十和田市(旧十和田市分)、六戸町、おいらせ町)についての面積当たりの単価は、A地域の単価1.2倍になります。
- ・一部特定の団地に立地し、増加雇用が10人以上の場合、算定単価に2,500円/㎡の上乗せが行われます。
- ・増加雇用者数とは、平成19年3月1日以降、対象設備の整備完了日から30日後(平成20年2月末日を最終日とする)までに増加した雇用者数をいいます。

お問い合わせ先
(財)電源地域振興センター 立地審査課
電話：03・5405・8113
e-mail: ritti@dengen.or.jp まで

「電気」のふるさと新じまん市」を 千葉・幕張メッセで開催しました

「電気」のふるさと新じまん市」を、平成十九年四月二十日(金)～二十一日(日)の三日間、国内最大級である旅の総合見本市「旅フェア2007」と共同で、千葉の幕張メッセで開催しました。国民的に人気のある「旅」と「食」との融合によって「楽しさ」の相乗効果を演出し、これまでの「じまん市」のお客さまに加えて、新しいお客さまへも電源地域の紹介をすることができました。期間中は十五万人を超えるお客さまにご来場いただき、会場は終日にぎわいました。



「電気」のふるさと新じまん市」エリアでは、北は北海道から南は沖縄まで六十二市町村が出展し、約一〇〇ものこだわりの産品や電源地域の豊かな自然や文化、社会的役割を紹介し電源地域へ

の理解促進を図りました。

特に「ミニステージ」では、市町村の魅力を展覧者の方が自ら紹介し、「わが町の特産品」をプレゼントにじゃんけん大会を開催したり、電源市町村の首長が出演し電気の生産地をPRしました。

また、恒例の「じまん市大賞」には、出展品の中から応募のあった二十産品がエントリーされ、百貨店バイヤーや流通関係者による厳正なる審査の結果、「青森県七戸町」「中村さん家の手作り・こだわりの逸品(リンゴジュース)」が大賞に選ばれました。これを受け代表の岡村光男さんからは「りんごの中でも完熟したのみを使用し、無添加、無着色にこだわって製造しました。商品化までには素材の選び方や製造方法など試行錯誤の繰り返しでしたが、このよう賞をいただくことができて大変うれしです」と喜びの声が聞かれました。



「じまん市大賞」を受賞した産品を紹介する青森県七戸町代表の岡村光男さん

「電気」のふるさとじまん市 産品ネットショップ」 リニューアルのお知らせ

当センターでは、電源地域の特産品をインターネット上のショッピングモールで紹介する「電気」のふるさとじまん市産品ネットショップ」を実施しています。これは電源地域の魅力ある特産品を全国に紹介し、通信販売で購入する機会を提供するもので、昨年十一月のオープン以来、多くの方々にご利用いただいております。



携帯版もあります
http://pokb.jp/user/6131165

「電気」のふるさとじまん市 産品ネットショップ」
http://www.jimanshi.com/
または http://www.bidders.co.jp/user/6131165

旬にリニューアルいたします。今回のリニューアルでは、取り扱う特産品を更新するほか、特産品の写真や紹介文を増やし、その魅力をこれまで以上にPRして、更なる購入につながっていくと共に、その特産品が生産されている地域にも興味を持ってもらえるように、市町村を紹介する写真や情報を商品ページに掲載する予定です。また、「産品ネットショップ」のリニューアルに合わせ、「じまん市メールマガジン」の発行も始めました。「産品ネットショップ」の紹介を中心に、週一回のペースで発行しています。「じまん市メールマガジン」では購読者を常時募集しておりますので、配信ご希望の方はこちらまでご連絡ください。

お問い合わせ先
■お問い合わせ先
(財)電源地域振興センター 販売支援課
電話：03-5405-8119
e-mail: hanbai@dengen.or.jp

【Vol.7 読者の声から】

●女性の視点と行動力によって特産品や観光振興を進めている上田市丸子地域を紹介した「電源地域のサクセスストーリー」を読んで、地域で新しいものを作り出している女性たちの活力に感心しました。

(山口県和木町 女性)

●上田市丸子地域の誌面にご登場された女性たちからは、地元を愛している気持ち伝わってきました。

(新潟県刈羽村 女性)

●まちづくりにはソフト面での充実が望ましいと思うが、すぐに収入に結びつくもの少なく難しい点が多いと感じています。

(石川県志賀町 女性)

●投稿記事「読者の声」には、地域の特色に誇りを持った声が多くあり、感心しました。

(北海道奈井江町 女性)

●最近私の市では、政策でなく市民から地産地消の動きが出ています。特に滝川産のホルユタカ小麦を使った料理が多くなっています。

(北海道滝川市 男性)

【読者プレゼント】

今号の特集「Pick Up」にご登場いただきました「會社NEXT」代表・細谷さんのご厚意により、「会津漆器」を五名様様にプレゼントいたします。とじ込みのアンケートハガキに本紙へのご意見、ご感想などを記入の上、平成十九年七月二十日(消印有効)までにお送りください。なお、当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。



「会津漆器」に関するお問い合わせ先

会津漆器協同組合
福島県会津若松市大町一七七一
TEL:0242-244-5757

【編集後記】

皆さまからのおハガキを楽しみに読ませていただいています。今後ともよろしくお願いたします。(S)

人事往来

●電源立地都道府県知事(平成19年2月～4月選挙分)

都道府県名	氏名	当選月日	県名	氏名	当選月日	県名	氏名	当選月日
愛知	神田 真秋	2月4日	福井	西川 一誠	4月8日	徳島	飯泉 嘉門	4月8日
北海道	高橋 はるみ	4月8日	三重	野呂 昭彦	4月8日	福岡	麻生 渡	4月8日
岩手	達増 拓也	4月8日	奈良	荒井 正吾	4月8日	佐賀	古川 康	4月8日
東京	石原 慎太郎	4月8日	鳥取	平井 伸治	4月8日	大分	広瀬 勝貞	4月8日
神奈川	松沢 成文	4月8日	島根	溝口	4月8日			

●電源地域市町村首長(平成19年2月～4月選挙分)

市町村名	氏名	当選月日	市町村名	氏名	当選月日
木島平村(長野)	芳川 修二	2月4日	函館市(北海道)	西尾 正範	4月22日
菟野町(三重)	石原 正敬	2月4日	室蘭市(北海道)	新宮 正志	4月22日
生坂村(長野)	藤澤 泰彦	2月6日	夕張市(北海道)	藤倉 肇	4月22日
美浜町(和歌山)	入江 勉	2月6日	滝川市(北海道)	田村 弘彬	4月22日
舞鶴市(京都)	舞藤 彰	2月11日	北上市(岩手)	伊藤 伊藤	4月22日
清川村(神奈川)	大矢 明夫	2月11日	上小阿仁村(秋田)	小林 宏晨	4月22日
潮来市(茨城)	松田 千春	2月18日	大蔵村(山形)	加藤 正美	4月22日
御代田町(長野)	茂木 祐司	2月18日	松枝村(福島)	星 光祥	4月22日
山元町(宮城)	大條 修也	2月18日	猪苗代町(福島)	津金 要雄	4月22日
井川町(秋田)	齋藤 正寧	2月18日	柳津町(福島)	井関 庄一	4月22日
美浜町(福井)	山口 治太郎	2月20日	平田村(福島)	二瓶 清美	4月22日
東川町(北海道)	松岡 市郎	2月23日	古殿町(福島)	岡部 光徳	4月22日
山ノ内町(長野)	竹節 義孝	2月25日	会津若松市(福島)	菅家 一郎	4月22日
野尻町(宮崎)	長瀬 道大	3月11日	高崎市(群馬)	松浦 幸雄	4月22日
浜松市(静岡)	鈴木 康友	4月8日	桐生市(群馬)	亀山 豊文	4月22日
芦別市(北海道)	林 政志	4月15日	碓氷村(群馬)	熊川 栄	4月22日
赤平市(北海道)	高尾 弘明	4月15日	佐倉市(千葉)	蔵 和雄	4月22日
三笠市(北海道)	小林 和男	4月15日	習志野市(千葉)	荒木 勇	4月22日
砂川市(北海道)	菊谷 勝利	4月15日	鋸南町(千葉)	白石 治和	4月22日
伊達市(北海道)	菊谷 秀吉	4月15日	おおい町(福井)	堀内 茂	4月22日
大館市(秋田)	小畑 元	4月15日	富士吉田市(山梨)	南アルプス市(山梨)	今沢 忠文
日立市(茨城)	櫻村 千秋	4月15日	茅野市(長野)	柳平 千代一	4月22日
鈴鹿市(三重)	川岸 光男	4月15日	阿南町(長野)	佐々木 暢生	4月22日
敦賀市(福井)	河瀬 一治	4月15日	小谷村(長野)	小林 三郎	4月22日
姫路市(兵庫)	石見 利勝	4月15日	土岐市(岐阜)	大野 信彦	4月22日
京極町(北海道)	山崎 一雄	4月17日	渡辺 公夫	谷口 尚	4月22日
新十津川町(北海道)	植田 満	4月17日	白川村(岐阜)	富土宮市(静岡)	小室 直義
中川町(北海道)	亀井 義昭	4月17日	富土宮市(静岡)	田原市(愛知)	鈴木 克幸
豊富町(北海道)	工藤 栄光	4月17日	美浜町(愛知)	山下 治夫	4月22日
壮瞥町(北海道)	山中 漢	4月17日	朝日町(三重)	田代 兼二郎	4月22日
足寄町(北海道)	安久津 勝彦	4月17日	五條市(奈良)	吉野 晴夫	4月22日
矢巾町(岩手)	川村 光朗	4月17日	すさみ町(和歌山)	橋本 明彦	4月22日
磐梯町(福島)	五十嵐 源市	4月17日	周南市(山口)	島津 幸男	4月22日
会津坂下町(福島)	竹内 晔俊	4月17日	那賀町(徳島)	坂口 博文	4月22日
松川町(長野)	竜口 文昭	4月17日	松山市(愛媛)	中村 時広	4月22日
小山町(静岡)	高橋 宏	4月17日	土佐町(高知)	西村 卓士	4月22日
東員町(三重)	佐藤 均	4月17日	直方市(福岡)	向野 敏昭	4月22日
下北山村(奈良)	上平 一郎	4月17日	芦屋町(福岡)	波多野 茂丸	4月22日
大崎上島町(広島)	藤原 正孝	4月17日	長崎市(長崎)	田上 富久	4月22日
遠賀町(福岡)	木村 隆治	4月17日	佐世保市(長崎)	朝長 則男	4月22日
南小国町(熊本)	河津 修司	4月17日	小国町(熊本)	小国 耕亮	4月22日
諸塚村(宮崎)	成嶋 孝孜	4月17日	湯前町(熊本)	鶴田 正己	4月22日
中頓別町(北海道)	野邑 智雄	4月22日	水上村(熊本)	成尾 政紀	4月22日
鹿追町(北海道)	吉田 弘志	4月22日	大分市(大分)	釘宮 博	4月22日
今金町(北海道)	外崎 秀人	4月22日	別府市(大分)	濱田 晃史	4月22日
由仁町(北海道)	竹田 光雄	4月22日	木城町(宮崎)	田口 晃史	4月22日
美瑛町(北海道)	浜田 哲	4月22日	宜野湾市(沖縄)	伊波 洋一	4月22日
美深町(北海道)	山口 信夫	4月22日			
天塩町(北海道)	浅田 弘隆	4月22日			

■ 産品自慢 —— Vol.8 滋賀県 木之本町

くずどーふ地酒

木之本町は、滋賀県の北東部に位置し、清らかな水が豊富なこの土地では古くから発酵文化が栄え、現在も造り酒屋2軒、醤油醸造所3軒が営業しています。

その造り酒屋の一軒である「富田酒造」と地元菓子店である「菓匠禄兵衛」のコラボレーションにより生まれたのが「くずどーふ地酒」です。

「くずどーふ地酒」の「くずどーふ」とは、「菓匠禄兵衛」が4年前から小豆と3種類のフルーツ味のラインナップで販売し、葛がもつ独特のプルプルとした食感が特徴のゼリー風のお菓子です。日持ちも一ヶ月以上することから、地元はもとより、観光客にも喜ばれています。その「くずどーふ」に、お客様からの「もっと地元色の強いお菓子を」という要望に答え、新メンバーとして加わったのが「くずどーふ地酒」です。

「菓匠禄兵衛」の担当者が、以前から交流のあった「富田酒造」のご主人から地元の酒米を使ったお酒があると聞いて、「これだ！」とピンと来たのが企画の始まりでした。「菓匠禄兵衛」の担当者は次のように話してくれました。

「教えてもらったお酒は醸造アルコールを添加せず、お米の発酵によりアルコールが生成される純米酒でしたので、人工的なアルコールに比べて麴の香りがよく残り、口当たりも丸く滑らかでした。造り酒屋のご主人に『お菓子の材料に合う!』とお墨付きをもらい、早速試作に取り掛かりました」。



くずどーふ地酒 1個130円(税込)

これまでの「くずどーふ」には、すべて「あんこ」が入っていましたが、日本酒の風味を最大限に引き出すために、今回は「あんこ」は入れないことにしたそうです。「『あんこ』を入れない分、これまでと同じような弾力のある食感が出せず、何度も失敗を繰り返しましたが、葛の細かな配合により食感を改善し、最後に柑橘系の果汁を少量入れることで、日本酒がもつ麴の風味をより引き出すことに成功しました」。

現在では、商標登録を取得し、百貨店の催事を基盤に販路開拓しています。地元を愛する方々の温かい思いが伝わるさわやかな「くずどーふ地酒」。冷やしてお召し上がりください!



「くずどーふ」とコラボレーションした富田酒造が作る地酒「七本槍」

お問い合わせ先 有限会社 菓匠禄兵衛 担当 居川信彦
TEL 0749-82-2172